

野口米次郎

定本詩集

第二

表象抒情詩

第一書房

80

75

70

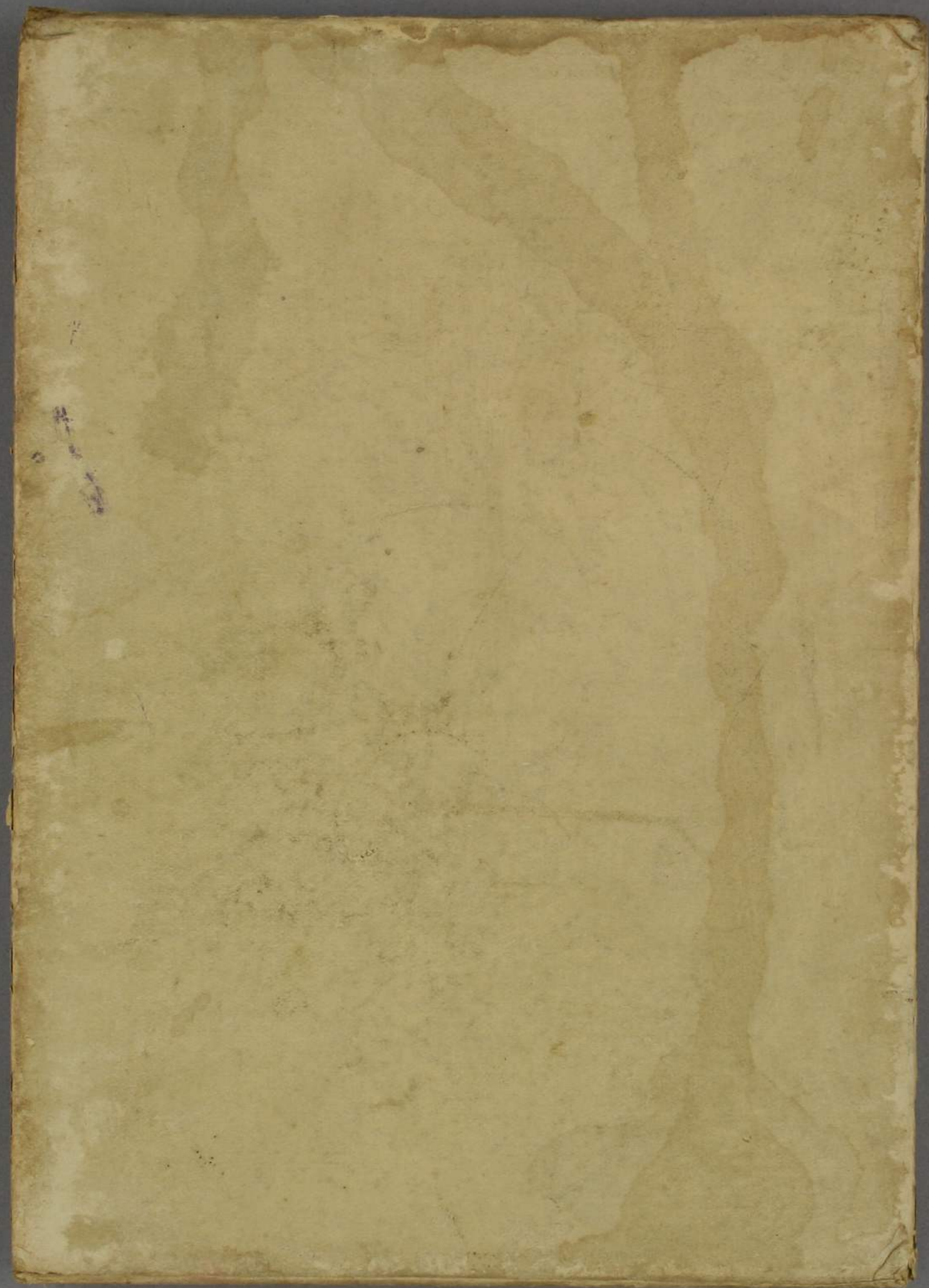
65

野口米次郎
定本詩集

第二

表象抒情詩









第二象詩

野次郎



第一書房







詩
集

野口米次郎著

第二

表 象 抒 情 詩

東京 高輪

第一 書房 刊行

目次

| | |
|--------------|----|
| 天地創成…………… | 三 |
| 降神の節會…………… | 四 |
| 月夜…………… | 六 |
| われ山上に立つ…………… | 一〇 |
| 新世界…………… | 一四 |
| 進軍…………… | 一六 |
| 鐘の音…………… | 一八 |
| 船頭…………… | 二〇 |

山上の一本松……………三
 北齋の富士……………三六
 梅の老木……………四〇
 女の能面……………四三
 椿の小舟……………四六
 蓬萊の島……………四八
 詩人……………五〇
 園庭……………五三
 祈禱……………五四
 囚人……………五七
 蝸牛……………五八
 胡蝶……………六〇

魔法師の風……………六三
 新しい感情……………六三
 幽霊……………六四
 森林……………六六
 雨……………六八
 ロバート・アラウニングに與へる……………七〇
 メレデスに與へる……………七二
 老スタダードに與へる……………七四
 二十年後ウオキン・ミラーの山莊を見舞つて……………七七
 某哲人に與へる……………八二
 同盟罷工……………八七
 蟋蟀……………九〇

| | |
|----|----|
| 認識 | 二八 |
| 机 | 二〇 |
| 人麿 | 二三 |
| 懺悔 | 二四 |
| 鶯 | 二六 |
| 答 | 三〇 |
| 疊算 | 三三 |
| 乾杯 | 三四 |

| | |
|------|-----|
| 海の騎手 | 九二 |
| 美の證跡 | 九四 |
| 醜 | 九六 |
| 影の隱處 | 九八 |
| 想像 | 一〇〇 |
| 達磨 | 一〇二 |
| 月光 | 一〇四 |
| 經帷子 | 一〇六 |
| 碑銘 | 一〇八 |
| 一石 | 一一〇 |
| 旅行者 | 一一三 |
| 春訪る | 一一五 |

諸君がこの詩集を買って下さつたならば、一度讀んだ後は十年もふせて置いて、それから再び讀んで下さい。この詩集の詩は、私が五年も十年も二十年も三十年も以前に書いたものを書き直したのです……少くも私には四半世紀の價值のある詩ばかりです。諸君が十年後再び讀んで、最初のやうな感じを持たれるかどうかは知らないが、私自身は二十五年後再びこれを讀んで、必ずや半世紀の價值があるを叫ぶであります。

第二表象抒情詩

天地創成

われ山上に立ち、深い霧に自らを失ふ時、

われその柱となり、宇宙は作られたりと思ふ……

天地創成の始め、

深さ否な深さのない深さの上に立つ神は、則ちわれにあらざるか。

降神の節會

諸君の詩が終ると、

私の詩の幕が開く……

降神の節會の場面、

黒い長い帳こはりが窓に垂れる。

ここに入らうとするものは、墨の僧衣を着ねばならない、

手に思索の數珠を握つて、

形體エンボダイメントの集成を思つてはならない、

そしてその釋放(ダイスレット)を祈らねばならない。

面前に燃える蠟燭に眼を据ゑ、

沈黙から沈黙への路を求めねばならない。

時計が合圖をする時、

諸君は黒い空中の中から、輝き上る現實の姿を認めるであらう、

諸君は一度に禮拜せねばならない。

この時、私の詩の幕は鎖されて、

太陽つひの光は諸君の頭上に落ち、

その足下に花が咲くのを見るであらう。

もとより私は手品師でない、

ただこの節會を司る貧しい一僧侶に過ぎない。

月夜

明月や池をめぐりて夜もすがら 芭蕉

悲しき月は山を、
われは静かに町を離れ、
漸くにして、われ、悲哀の思ひを
聲なき風に振り落せり。
月の歩みは美しけれど冷たし、
われも銀の平和を踏み、人間の路より遠ざかる。

神祕の光、露を帯び、恰も愛の耳語みみごゝりの如く、
わが髪に忍び入る……わが髪は微風かぜに亂されて雲の如し、
われ混乱の情の甘さを感じれど、その何たるを知らず。
われ月に微笑ほほえみ、
月われを理解せり……沈黙いやが上に深し。
水面を見れば、この世以外の夢、
青い憂愁の秋をのせて無言に歩めり。
月は大きい柔らかな笑を水に投げ、
誇りを歌ふ海を讀へるが如し。
思へば、海岸に言ひ寄る海的情熱に、

女性に打勝つ祕密あれど、

われ遠き彼方に女性の愛を見捨てたり。

徐ろにわれ、月の海に沈むの美しさを惟ひ、

月を崇拜して再び海中を出でんことを冀ふ。

鳥は潮の眞珠を黒き羽はねより散らしつつ、

にはかに波の底より飛び上れり。

われ海岸に坐り、

耳を海に欝て、

悲劇の眼にて遙に月を眺む。

ああ 月の沈黙は海の聲の如く偉大なり、

海は聲を、月は沈黙を守る……

そは世界の始まる第一日より變ることなし。

われ海岸を月と共に歩み、

翌朝に及べり……わが思ふ所は、

月の思ふ所のものなり、われその何たるを知らず。

われ山上に立つ

かくてわれ山上に立ち、
生命と沈黙の勇者……勝ち誇り、
空に眼をむけ、突立ちあがり、
没せんとする太陽を見て微笑み、麗しく悲しき告別を歌ふ。

夕は神祕にてわれをとり巻き、
その香氣は傳統の如くかんばし、
ああ われにしるのび寄る諸々の思想は、
譬ふれば外國の微風の如く、或は蛇の如し。

人若しわが山上の姿を見なば、
靜かに飛ばんとする詩神なり、
われに黄金の快調あり、氣高き風貌ありといふなるべし。
げに、われは都會の劍を嫌ひ、
その狂暴なる威嚇をのしりて立つものなり。

太陽は重も重もしく遙かに沈み、
甘き誘惑と暗明の手にわれを残しゆく。
夕はながながとその影を拂つて西方へと過ぎ、
その過ぎゆく夕と共に、樹木の長き影は消ゆる……
如何に沈黙の歌はわが魂にしひび込まんとするよ。
われは、蟋蟀の間、
星が歌ふ幽玄のなかに依然として立ち、
如何に柔かにその身が夕に溶けゆくかを見んとするなり。
月は徐々として上る……わが影は

夢の如き夢の逍遙を地上に描く。
空に微笑み無言の歓迎を述ぶる一個の人間あり、
そはわれにあらざるわれなりと知り給へ。

新世界

新しい世界に黄金の呼吸がある、
ああ 愛の黎明、人生は火の雲の如し、
君よ 白い海の歌に目覚め、微風に濡れ給へ。
太陽の戦車は前進する、

君よ 豫言と生命の喇叭に起き給へ。
戀愛と歌の世界は新しい……
歌は白百合の如き信仰から立ちのぼり、
戀愛は赤い祈禱の胸から溢れる。
君よ 勝利と戦旗の聲に起き給へ、
人生の高まる歌に目覚め給へ。

進軍

……人生へ 戸外へ

火の進軍あるのみだ。

風雨に晒されることを恐れるな、

君の眞價はそこにある。

一時的流行や敵に追ひかへされるな、

自分の場所を断じて明け渡すな、

抗辯の一表象となつて存在せよ。

若返りと謀反とを歌ひ、

(平和な進化の歌は無用にし給へ)

力づくで王國を奪ひ、

禮儀をぶち破れ。

君よ 喇叭を吹け、喇叭を吹け、喇叭を吹け、

眞生命を得るために信仰を無くし、

戦利品に君自身の歌を書かせることだ。

鐘の音

鐘の音に

私の郷里は横はる……私は疲れた生命の一音符。
祈禱は日夜輝く光線の如く、
影暗き信仰の胸を接吻する。

微風の路に添つて、

私は思想の花弁を蒐める……

それは平和の眠で養はれたもの、
戀愛は幸福なれど寂しい、且つ歌ひ且つ彷徨ふ。

ああ 山の上に、川の上に、

汝の廣漠たる力を空氣の如く慄かしめよ。

私は閃く木の葉に汝の言葉を讀み、

汝の神祕を草の耳語に悟る。

船頭

夜の渡船場で客待ちの船頭は叫ぶ、

『驚異の町へ船が出ますよ!』

『提燈をともして水を照らしてください、
暗闇が私共の骨を噛むであらう。』

『客人よ 提燈は無用になさいます、
真黒な思索と寂寞の波をすべつて、
始めて驚異の町へ行かれます。』

我儘軽浮な提燈は航行を誤らしめる、
客人よ 闇黒を恐れてはいけませんぬ、
孤獨の洗禮を受けなくては、客人よ、
驚異の町への切符は買はれませぬ。』

山上の一本松

昨朝私はお前と鳥の合唱を聞いた、
昨夜もお前と月の合唱を聞いた。
そしてお前に燃える音律の火が、
如何に相手の心と溶けあつて、完全に歌の一曲を奏し終つたかを見た。
お前の謙讓の態度、他を理解する叡智、
それに自分に對する批判力は如何にも立派だ。

(私は自然に向ふと恥かしい肉の一斷片たるに過ぎない。)
ああ 山上の一本松、
お前は鳥と月との場合のやうに、
川とも雲とも乃至は形の歪んだ岩とも調和して、
いつでも合唱の招きに應ずるであらう。
(私は随分選擇の多い片意地な人間の一人であることを恥る。)

今日お前は鳥一羽も飛ばない青空の下で、
たつたひとり歌つて居る……
お前は、ああお前は朗ほだかな聲の獨唱家！

私はお前の獨唱を聞いて、

始めて最高潮に達したお前の美を見ることが出来た。

お前の獨唱家としての態度に大きな獨立の威嚴がある、

そしてその獨立は沈黙と孤獨の聖い空氣きよくのなかで育つたものだ。

お前をお前のみたらしめるお前の獨唱、

ああ お前の銀のやうな獨唱に、

何たる壯麗な神嚴を私は感ずるであらうか。

私は泣かないばかりの感激をお前の獨唱に感じた。

多少たりも個性は合唱の場合に破れる、

だが、

獨唱は自己表現の完全なものである。

ああ 山上の一本松、

お前の獨唱家としての價は、

私に沈黙と孤獨の美を理解させた。

ああ 自分だけなる獨立の威嚴を得たい。

私は遠方から、

お前の獨唱を聞かう、私の親愛なる一本松よ、

歌へ！ 歌へ！

北齋の富士

その神聖な息吹に觸れ、
私共は神の姿に歸へる。
その沈黙は即ち歌、
その歌は即ち天國の歌だ。
今熱病や憂苦の陸土は
すすしい眼まなこの平和の家と變る、

ただ死ぬべく生れる人間の陸土から、
私共は遙か離れた平和の國に入る。
ああ 私共は
富士の壯麗に觸れ、
神の誇りとして富士を歌ひ、
私共の影をその胸の中に封じこむ……
ああ 富士は香しい永久の存在だ、
白い顔の驚異だ、
無比の光景だ、
何たる壯嚴！ 何たる美よ！

千の河水はその額に

富士の姿を載せて走る、

有らゆる山は、さし来る潮のやうに、

その頭をあげて富士山を禮拜する……

恰も最後の命令を待つかのやうに。

見よ、日本を圍繞する海は、

富士の影を眺め、

恰も詩を夢見るもののやうに、

平和の奏でる催眠歌に揺られ、

飢渴の歌や野狼の慾を失ふであらう。

私共は富士をめぐつて、死の一字を忘れる……死は甘い。

生は死よりも更に甘い。

私共は人間であると同時に神だ、

富士の無邪氣な友人だ、

ああ 永遠の富士よ、私は禮讚する。

梅の老木

薄墨の空を白く染め抜く梅の老木、

私の魂もお前のやうに年老いてゐる。

お前の祈禱に導かれて

(お前は單に人を喜ばせる花でない)

私も高い空に貧しい祈禱を捧げる、

言葉のない喜悅の祈禱を。

お前は形體美を犠牲にして香氣を得た、

花としてお前は、進化の極點に達したものだ……

お前は力の節約から得た充實性を完全に表象してゐる。

私は菅原の道眞がお前を嘆美したやうに、

今お前の前に尊敬を捧げる。

百年前のお前も、五百年前のお前も、

乃至は千年前のお前も、

今日のお前とたいした相違がないであらうと思ふと、

如何に徐々とお前の進化が動くかを驚かざるを得ない。

私の魂に於てもお前と同様だ……

私は幾千年間この地上に生きて來たか知れない。

お前の風に揺れる白い花瓣を見ると、

私の忘れた追憶の幽霊が

漣さざなみのやうに無終エタニチの波から目覚めるやうに感ずる。

若し私が花であるならば、お前となつてこの庭を飾るであらう、

若しお前が人間であるならば、私となつてこの書齋に坐るであらう。

お前と私は存在の形は異つてゐるが、

美しく單純で眞實な一表現に過ぎない。

お前が花咲いて一陽來復を語る態度に、

何たる凜とした大膽さがあるであらう。

若し私に快活の何かがあるとしたならば、

私の年取つた魂の幹から笑ふ白い梅一輪の快活であるであらう。

女の能面

あなたが橋掛で慎しやかな白い拍節ピエドを踏むと、

あなたの體は精細な五官以上の官能で震へると思ふ……

それは涙と笑の心置きない抱合から滲みでるもの、

祈禱で淨化された現實の一表情だ、

あなたは感覺の影の世界を歩く……暗いが澄み切つた、冷かで而かも懐しい。

ああ 如何なる天才があなたを刻んだか、

彼はあらゆる官能の體驗を蒸溜し、蒸溜し、

最後に残つた尊い氣分をあなたに與へたに相違ない、

故に、あなたは特殊の廣い深い想像の世界……いな詩の世界に目覺めた。

私はあなたを見て、いつも感情の貯藏とその表現に驚く、

あなたは偉大な感情の保留者だ、

あらゆる世界の舞臺で、あなたのやうな感情の節約者は見出されますまい。

(眞實の藝術は感情の節約から始まる。)

然しあなたは、適當な一語勢^{エソフアンス}を得て即座に涙となり、

また笑となる、

(私は笑と涙が同根元から流れ出ることを知つてゐる。)

ああ 何たる中性的驚異があなたにあるであらう。

あなたの細長い眼と高く離れた所にある一對の眉、

割にふとく低くどつしりと坐つた鼻、

白い齒並を見せた下唇が上の方へしやくり上つた小さい口、

如何なる女でも、自分の類似をあなたの何處かに見出すであらう、

あなたは一個の女でない、

すべての女だ。

すべての女を白で碎き、その粹を集めて出來たものが即ちあなただ……

あなたはすべての女の幽霊だ。

椿の小舟

生に疲れた椿の花が
お仕置になつた首のやうに
ぼとんと……ああら、私の胸の小池に落ちて、
綺麗な小舟となりました。
夢を追ふ東の風は

目に見えない霊を落葉のやうに
散らして……御覧なさい、椿の小舟に乗つて、
右や左へと漕ぎました。
名のない草や花が
胸の小池の岸から聲たてて
『舟に乗せてよ、舟に乗せてよ』と叫んでも、
小舟の霊は啞で聲でありました。

蓬萊の島

千羽の鶴が諧調の音楽を響かし、
山々は瞑想に入つて、神様のお呼出しの聲がかかるのを待つ。
永劫は想像の羽をのばして彷徨ひ、
百足の龜は青い松の木のもとに蹲る。

ああ 青い青い天鵞絨の天は高く、
青い青い鏡の海は島をめぐる、
永遠の催眠歌をうたつて、その魂を和らげる。
ここは不老不死の蓬萊の島……
温い春風に乗り、
汝の魂の船を海岸へ寄せ給へ。

詩人

深淵と暗黒をつん裂いて、
輝き出づる神秘、一つの姿、
完全なる物、
恰も太陽の上るが如し。
ああ その呼吸は香しく、
その兩眼は星の道を照らし、

その顔に微風あり、
その背は天の光榮を擔ふ。
彼は空にかかる幻想きまろしの如く歩み、
永劫の情熱を放散しゆく。
彼は朝日の輝きに住居し、
その言葉は夕の音楽なり。
人若し彼の視線に會へば、
直に墳墓かぶつの塵を離れ
瑞樹の森へと動かざるを得ない。

園庭

沈黙は
恰も木の葉の間を歩く禪僧の如し。
塵と死の世界に何の意味があらう。

花瓣いくつ、詩の一節、
小さき園庭……それが私の世界だ。
日光と樹木の間を沈黙が歩む……
私はその姿を眺める一禪僧なり。

祈禱

かくて私の顔は閉された戸に對する……
戸の彼方に未知、廣漠、寂寞の國が横はる。
時は何時、日は何日、場所はいづこ。
私は木の葉のやうに、雲と風の招きによつて、
河が沙上に書きちらす路を歩く。

かくて私の顔は閉された戸に對する……
眼は闇黒のみを眺めて盲になるであらう。
戸を開けよ、
主の顔を示せ。
東は何處、西は何處、太陽はどこにある。
私を驚かすものは、夜……
死……さては未知の國。
ああ 私は自由と人生を論ずるには疲勞し過ぎてゐる。

閉された戸は私の感覚を奪った。私の顔は白い。
ああ 戸は永劫に開かれぬであらうか。
風よ 芥か何かのやうに、
私を天空に吹き飛ばせよ、
そして私を星の間に踊らせよ。

囚人

私は沈黙の墓地に坐睡する……
魔の空気にしぼられた囚人だ。
だが、無言は愛人の影のやうに柔い……
私は無言の波に浮び、憂愁の霧を胸に巻きつける。
わしの國さは曙光の國だ、
廢墟の夜から希望の太陽が生れるであらう……
しばらくの間、私は墓場の沈黙に坐睡したい、
だれも私を呼んで呉れるな。

蝸牛

『ああ、友よ、なせ君は今夜歸つて來ては呉れないか？』

はこの小屋、いな、寂しい世界で只管に寂しい。

見ると、戸口に這ふ蝸牛はその角をかくした……

『蝸牛よ、お前の角を出してくれ！』

東へ出せ、西へ出せ！ 嗚呼、眞理はどこにあるか……善は……光明は？

夜の闇黒、いな、世界の闇黒は私の魂をひと飲み飲み乾す。

私は、雨降る世界の雨降る夜、雨に濡れて糊のはなれた提灯の如しだ。

胡蝶

光線が静寂のなかを行ったり来たりする……
恰も木の葉がはばたくやうに。
眼前の庭はまるで灰色の繪だ……

この灰色の庭の上を、空中の巨人のやうに大きな輝いたものが横切った。
それは暮れゆく日と共に死ぬであらう胡蝶に過ぎない。
然るに沈黙に住む私の眼には、
それが空ほど大きい巨人であるやうに見えたのだ。

魔法師の風

本質に觸れよ。感觸、呼吸、さては暗示……この外なものに詩の生命いのちがあらう。君は私を子供じみてゐるといふ。私は君の冷笑を否まない。然しだ、私は決して子供ではない。

私の藝術たるや、支那埃及よりも年老いたりだ。知識も概念も私を欺くことが出来ない。風は薔薇の花はなのなかへさへ全宇宙の魂を運びこむ、私はこの魔法師の風だ。

新しい感情

私は感情をしづめたい、清めたい。言葉を亂用して、詩を愚かな斷片と破壊してはならない。私は人間の粗野な主張を忘れたい。自分の祕密を故意に物語つて、詩を傷つけ、詩を枯らしてはならない。

私は理知の風が外で砂煙を卷くのを聞く……私は畏縮する、私は失望する。しかし私の官能が凍え、活動の生氣を失はんとする時、私の新しい感情が徐々に醗酵して來るやうに感ずる。

私は自然を凝視する……私の耳に、池の面に落ちる木の葉のかすかな響が聞えて來る。

幽 靈

朝……

彼女の額の白きを顔に感じ、

私は眼をあげ、

露けき微風の足のすぎ行くを見る。

晝……

彼女の唇は情熱に微動する、

微動する所に、ほほゑむ所に、

黄なる日光は落ちる。

日暮……

彼女の髪は天鵞絨の影となつて私を巻く、

手を延べ、彼女を切に掴まんとする、

私は、日暮の暗さに觸れる。

森林

君は單に樹木たるのみにあらず、
われは人間の耳語と影とを君に發見するなり。
ああ われをして世界と生の悲哀より遠ざからしめ、
失ひし歌を再び取返へさしめよ。
君の心にわが靈を發見することは歡喜の極みなり。

森林よ、君はわが胸に面して立つ、
わが心に君自身の歌あり、
いな、君の深き影あることを發見すべし。
わが想像と樹木との同盟は尊し、
わが藝術の創造始めて完成せん。
森林よ、われを嘆美せよ、
われ君を嘆美すべし。

雨

雨に歌がある、お聞きなさい……

空の歌が聞える。

雨に歌がある、お聞きなさい……

地の歌が聞える。

雨に歌がある、お聞きなさい、

私は時代の脈搏と渴望と、神祕と人間の歌のすべてを聞く。

雨に歌がある、お聞きなさい。

地と空の歌が、人間の歌と一つになつた聲を聞く。

ロバート・ブラウニングに與へる

あなたは人生のバゼントを官能で見る喫煙室の物語師、
あなたの爽快な辯舌はあなたの藝術を朦朧化させ、
また朦朧を變じて告別の辭パレヱクトリたらしめる、
あなたは奇矯な誇りで裏書された田舎氣質だ。
あなたは時に虚無主義からただ逃れるため群衆的であり、

あなたの大きな表現の渦からきはあなたを偉大な傳奇作者たらしめ、
残忍に見えるため、あなたはしばしば神祕啓示を遊戯する。
あなたは色強い冒険の大食家だ、
天國と人生との間をセレネードするトロバドールだ、
六絃琴ギタにあはせるあなたの愛歌は、私共に肉體的苦痛さへ感じさせる。
あなたは現實家だが、不思議に眼を樂天主義に向ける。
あなたは人情の火の上で氣儘に踊る鷺頭獅身グリップトンだ。

メレデスに與へる

そこで感傷主義は異教奉信となつた。
汎神論が人生の解放だと想像してはならない。

メレデスよ、僕は知つてゐる、君の頭腦が疲勞した時、
君は論理といふ野蠻な遊戯をして遊ぶ。

君の傲慢な推論や馬鹿げた道徳や有らゆるものを忘れ給へ。
メレデスよ、僕と一緒に禪堂へ來給へ。

もとより警句を吐く爲めでない、
人生が昏睡裡に書く法則のなかを散歩せんが爲めだ。

我々は宇宙に於ける眞實の價値を發見し、そして牧羊神のやうな眼で、
太陽、女、樹木や巖石を歌つてのけたいものだ。

老スタダードに與へる

懐しの老チャーレーよ、僕は君にいろいろなことを語りたい……

明白に始も終もない物語や、

祈禱スプリチヤになつたり呪咀スプリチヤになつたりするやうな痛快淋漓なことを。

僕は、君があらゆる點で僕に同意し、

感激のあまり遂に千の小さい内證事さへ洩すに至ることを知つてゐる。

『小さい内證事は愉快だ』と、君は疲れた眉毛をつりあげていふであらう。

僕は君に椰榆フレイムつてみると想像する……君は『だって、神様がこんな人間に作つて仕舞つた！』と叫ぶに相違ない。

懐しのチャーレーよ、昔千八百九十九年の華盛頓でのやうに、もう一度僕は、

燃える聖火フレイムの下で君と一つの寢臺で眠りたい。

聖火の黄金の焰は、無邪氣な君の躰につれて立ち上つた。

僕は異教徒、君が首に懸けたスキヤビユラーや腕に入墨した十字架を見て如何に慄スプリチヤいたかを、今でも忘れることが出来ない。

僕等は正に一對の牧神……睡眠から目覺めた時いかにも牧神らしく、

生命と沈黙の古い道へその口笛を響かせた。

懐しの老チャーレーよ、君は世界を嫌ふ人、有らゆる形式を有つ懶惰の達人、

常春藤の陰から呪咀する鸚鵡一羽を君に與へ、
神聖な幽居の一隅に君を祭りこめたいと僕は願つた。

僕は日本から歸つて再び君を見る時、

君を全野蠻人とする力の靈符を君に與へると、君に約束したではなかつたか。

然るにああ、君は悲しい死の石の一塊だ。

恐らく君は今、君が常に恐れた『筆後れ』を感せず眠つてゐるであらう。

附言 チャールス・ワールエン・スタグートは私の親愛なる友人の一人で、英のスチーブンソンや米の詩人ミラーの親友であつた。散文や詩の著書十數卷がある。生前は華盛頓加特力大學の英文教授であつた。十數年前死んで、その骨は加利保爾仁亞のモンタレーの加特力教徒墓地に横はつてゐる。私は數年前渡米の節、親しくその墓地に花輪一個を捧げた。その日は春も目覚めかけては居つたが、灰色の風が強かつた。

二十年後ウオキン・ミラーの山莊を

見舞つて

ここは以前その呼吸で清められ、

今その死で一層に神聖化されてゐる。

私が彼と共に住んだ時以來、最早や二十年の歲月がたつ……

頭を低くこの長い二十年間の瞑想に垂れて、

私は獨り小路を歩いてゐる

この小路で彼の靈は、薔薇の花弁の間に人生の碑銘を書いてゐる。

(ウオキンよ、神の園丁よ、神はあなたを祝福するであらう。)

『お前の書齋は昔のやうにお前の歸るのを待つてゐる』

この言葉は、彼が私に送った最後の手紙の最後の文字であつた。

私は今ここへ歸つて来た……ああ、二十年の長日月が既に過ぎてゐる。

彼が『セガレ』と呼んだ往年の青年は、今は多くの毛髪を頭から失つた、また悲哀を喜んで語らうとしてゐる。

私は夜あなたと共に、空中にも地上にも、どんなに

沙のやうに散らばつた星の間に眠ることを喜んだであらう、

(だれが空の星と村の燈火とを區別することが出来たであらうか。)

私はそれ等の光が『そこに光あらしめよ』といふあなたの命令で顯れたときへ

思つた。

あなたは熊の皮を肩に掛け、長靴をはいた豫言者……

私は朝あなたと共に山に犁かれた霧の畔を登り、

言葉を埋めて、神様の沈黙を掘つた。

なんたる壯大な沈黙が銀色の金門灣から流れこんだことであらう、

帝王の如き太陽がこの灣へ沈んでいった時、なんたる沈黙があつたであらう。

ウオキンよ、かかる瞬間に我々の耳は夕景の蟋蟀クリケクトを迎へ、

我々は無言に徘徊して、空中に大きな提燈を見出して微笑した。

ウオキンよ、私はあなたが、あなたの愛するこの高丘ハイトで眠つて居られることを

喜ぶ。

春になると、紫色の空気は毛茸パタゴスや罌粟ポピーの笑ひの歌を振りこぼし、冬になると、霧が幽霊の軍隊のやうにこの山を占領して仕舞ふ……

その時あなたは墓場から歩き出し、霧に乗りまたがり、

『帆走れ、帆走れ』と『コロンブス』の言葉を叫ぶであらう。

あなたは生命の日に於てのやうに、死の世界に於ても生と詩の偉人であるであらう。

ウオキンよ、私は空虚な悲歌をうたはんが爲めここへ歸つたのでない、

私は人生の戦闘から戦闘へ移る間の一休憩を得るためにここへ來た。

私はあなたが幾年も幾年も死んで居られるとは考へられない。

私はだれかの聲を聞くやうに感じる……『ウオキンは酒一壺と

羊肉一塊を買ひに町へ出掛けた、待つてゐ給へ、ぢきに歸つて來るであらう。』

よろしい！ それでは香ばしい夕方の空気に頭と足とを横たへ、

私は彼の歸へるのを待つであらう、『おおヨネ、二十年たつた……』と叫び喜ぶ

彼の顔を待つであらう。

附言 ウオキン・ミラーの『コロンブス』は彼の作中最も入口に膾炙してゐる一篇である。

全篇五節より成る。その四節に、水夫共は希望を失ひ、『この狂氣の海は齒をむき出して嚙

みさうに見える。船長よ、親切な言葉をいつて下さい』といふと、コロンブスは『帆走れ、

帆走れ、帆走れ』と叫ぶ。その言葉は劍の如く飛べりて歌つてゐる。

某哲人に與へる

鳥と花が歌ひのこしたものを

あなたは取つて以て自分の歌とするであらう……

あなたの階音は生れたもの、作られたものでない。

藝術の叛逆を知らない歌をうたふといふことは尊い、
人生をして單純な力を得せしめるといふことは尊い、

(そのこと自身が尊い創造だ、)

理智の壓制を忘れるといふことは尊い。

あなたはミニエトやシャンソンや空想に止れと命する、
酒宴や假装に閉ぢよと命する。

あなたは高い座席から下りて、

粗末な着物と言葉の民衆のなかに坐る。

單純のなかにあなたは自分の解放を求めた。

眞實なる自己を確にするといふことは尊い。

現實のないところに眞實の想像がある理由がない……

人生を平易に見るといふことが

發見であり感動である。

私はあなたに人生と世界の問題を讀むであらう、

涙と喜びの撚り合せを、

空間の深さ、時間の廣濶を、

完全な宇宙の廻轉を。

私はあなたに人間の避くべからざる偶然への服従を讀むであらう。

急迫の場合を變じて歌とする眞實なる知識を讀むであらう。

音律の變化はただ急迫そのものから得られる、

眞實なる感情と均勢は

法則を嚴守することを我々に迫る。

あなたの歌は時間と空間との上に浮きのぼる、

不滅とか時好とかに煩はされない生命の心理状態……

眞實なる觸感……

驚異……

あなたの歌はあなた自身以外に何物でもない。

私は忙しい風の足が

人情と法則を暗示しながら過ぎるのを見る、

風は熱情が横はつてゐる陰影へと急ぐ。

おお風よ、私はお前と共により良い生命と詩とを築くであらうか。

あなたは夢と希望から生れた一光明、
生の戦慄を歌ふ人……
あなたの瞑想の魔法、
あなたの歌の妖術をして、
沈黙の沙漠の上に遊戯させてください。

同盟罷工

午後、
三時。
蟬の震動、
(誇りある存在の音、)
岩にしみ入る。
樹木の影、
あらゆる夏の暑さを感じて、

もの静か。

蜥蜴は

穴にかくれ、

私はただ獨り、

庭の蟻を眺める。

蟻は

松葉牡丹の間を駆け廻る。

庭は

生命ライフを忘れ、

静かな貝殻のやうだ。

……時は

午後、

三時。

庭の外に、

急な叫び聲が

雲のやうに高まる。

耳をそばだてると……

『號外！ 號外！

同盟罷工！ 大同盟罷工！』

蟋蟀

小山の麓で蟋蟀が鳴き始めると私の詩歌は始まる、
私の詩歌の第二章は静止の章だ……
さてまた、第三章は何であらう。

ああ 神様は宇宙一杯の掌を私の本の上に載せ給ふ。
主よ この憐れな僕しもべの爲めその掌をのけ給へ。
私の願は無駄であつた……
ああ いつまで私は瞑想をつづけねばならないか。

海の騎手

身は幻の生餌、

霧のなかに浮動する追憶に迷はさる。

私は混亂の繼續する所に生命ありと思へり。

逃げだす門を知らざる一箇の犬、

平和と思想の搖籃は私をいたく疲勞させたり。

ああ 大海に面して陸土を忘れ、

雷とどろく海波に大きな歌を發見することは喜ばし。

風の間はその祈禱と夢を失ふ時、

私は聲と歡喜の新生命を捕へ得たり。

私の心は光線ひかりと水と共に高く飛び、碎ける……

風と雲の友、

今日私は恐しき大海の騎手なり。

嘗て私は平和の小さき歌を地上に見出せしが、

今私は粗暴の歌に沈黙の轟くのを聞く。

私は海と沈黙の支配者、

太陽と風が海を赤く焼かんとする時、

私は風と海の騎手なり、いな狂人なり。

美の證跡

花が偽りの藝術に落ちる瞬間あり、
そは詩人が技巧に落ちる時なり。

(花は美の金線に舞ふ舞ひ手、

詩人は銀の樂器『人生』に歌ふ歌ひ手。)

虚偽、臆測、汝は兀鷲なり、何が故に花や詩人を亂さんとするか。

花として存在し、詩人として存在するのは一つの偶然なり。
同じ力の表現なれど、

進化の糸の撚法よりかた異なるのみ。

われはそれ等の形式を見ず、

ただ如何なる美の證跡あるやを知らんとするなり。

美の想像凝つては詩人となり又花となる、

詩人たるは即ち花たることなり、

舞ひ手たるは畢竟歌ひ手をして歌はせる爲めなり。

醜

彼は缺點だらけだ……それでいい、
美の時代は経過した、不完全や荒廢により多くの美が存在する。
私は彼の醜に動かされ、制服されて仕舞った。
彼は贖罪の可能を暗示し、

彼の後悔に何たる現實味があるであらう。
失敗を讚美せよ、
私はその不思議な妖術にかかり、
激烈な心理的變化の詩を味ふ。
彼は缺點だらけだ……それでいい、
彼に新しい藝術の感觸がある、
彼は一片情調の塊、近代の脈搏を歌ふ新詩人だ。

影の隠處

もろもろの偶像に面接して、
再びわれは影の隠處に立つ。

ここに沈黙は暗黒より更に年老い、

光はさまよひ、幽霊と化する。

不動明王は常に火と情との間に安置せらる。

聖き觀世音よ、冀くば嵐を静め給へ、

私をして星の如き黄金の言葉を得せしめよ。

寂しき山門の仁王よ、汝の失はれたる殿堂今は何處にありや。

われも汝と運命を等しくす、わが心の都は長く失はれたり。

わが想像の耳は兒童の叫びを聞く……

わが面前に立てるは兒童の保護者、地藏菩薩なり。

おお 美しき蓮花に坐る小さい女佛よ、君の顔をあげ給へ、

神祕破れたり……女佛よ、君の笑ひ顔、

いかんぞ君を忘れんや、君はわが死せし妹なり。

想像

私は寂しい火鉢をかこみ、その火を見詰める、
すべての音は私の耳から退き、
風のなかに沈黙は溢れて私の思想を和げる。
私は今燃える火で両手を温め、
火箸で火をつかみ、
城壁や櫓を築き、いな、ぶち壊はし、

如何に眞赤な火が灰の静止に入るかを眺める。
急に思想が私の胸にのぼる……
私は、この火が私自身ではあるまいかと、自問自答する。
火箸はいつたい何だ……私自身を、いな火を弄り誑かし欺く火箸は。
火箸よ、私はお前を『想像』と呼ぶ……
想像……いな火箸よ、私を（いな一塊の炭火だ）親切に取扱つて呉れ、
ちぎに灰の沈黙にしづみ行かねばならない自分だから。

達磨

君は山と樹木との對座へ、われを誘ふ、
われは自然の實體へと滲透しゆく。
幻と詩歌に繞れる自然は尊し、
今や自然はわれに合一して確實となれり、

自然の理解……自然の愛着……これ等みな遊戯沙汰の言葉なり。
ああ 瞑想の魔術、沈黙の權威われにありだ、
如何なる隱密極秘もわが自由を妨ぐるを得ず、
靈の無遍を夜闇と死滅とに發見せよ……
わが世界には時の暴力滅び、
生の苦痛その姿を潜む。

月光

無言の月が地上の胸に落つる時、
大地は、恰も祈禱する如く、
有らゆる嘆息の最も白き嘆息を呼吸する。
(ああ 月と大地は一つの祝福に抱かる。)
私は獨り草の上に立ち、
荒廢の美をじろじろと眺め廻す。

月よ、汝の光明で私を洗ひ洗へ、
私の體からだを焼いて靈の焰たらしめよ。
私が肉の干涉と
密かに動く不慮の謀反に打勝つ時、
私は卒然と鷹の如く飛翔して、
太陽と愛の胸を突くであらう……
私は瞬間の驚異だ、永劫の啓示だ。
(かういつても、決して過言であるまい。)

經帷子

『君、經帷子きやうかたびらを持つて来るには少々早やすぎるぢやないか。』

死は私の言葉に應じて、妙に微笑し、

『ほんの假縫かりぬいにですよ』と私に答へた。

『そこが餘り緩るすぎやせんかね、またここが堅すぎる。

第一、僕はこの色が氣に入らない。

何はさて置き、多少スタイルが無くてはね。』

死は大きな笑を洩して輕蔑あざわらひ、

私にいつた、『御常談ごじょうだんものですよ、

これはあなたの生命いのちの着物を

一寸ひつくり返へたのみぢやありませんか。』

碑銘

彼女は結婚の意味を知らずに夫を持った、
子供が出来て始めてその個性は目覚めた……
そして人生の祕密に觸れた。

彼女は愚であつた、あたらし自分の個性を愚痴で墨塗つて仕舞つた、
猜疑の言葉で自分を主張しようとした。
彼女は愚であつた、その力を意識せずに死んだ、
若し意識してゐたとすると、それを誤用して死んだ。
彼女はどんな場合でも、結婚の日から死の日に至るまで、
夫に對する永遠の女王であつたことを知らずに死んだ。

一石

野原を右へ、風は吹かうとする。

私は、武骨な指をあげ、

『左へ吹け』と風に命ずる。

(風は私のいふことを、聞くだらうか。)

花は、文字通り、紛々と地上に散る。

ほほ骨のたつた顔を、私はあげ、

『もう一兩日も散るな』と花に命ずる。

(花は私のいふことを、聞くだらうか。)

自然が人間に従ふかどうかは、問題でない……

私が自然に『否』といふ、そこが要點なのだ。

私は盤上に一石コツンと置く、私の満足は其處にある。

私は結果の如何を問ふものでない。

旅行者

『あなたの髪は薄い、頬骨は高い、譬へると冬の禿げ山だ。静寂の姿はいいが、あなたの眼の倦怠の微光が氣にかかる。あなたは、どなたですか。』

『私の名前など話した所で詰らない……風のやうな旅人に過ぎない。』

『時』^{タイム}といふ嚙み煙草をのべつに嚙んだため、私の齒は黄ばんで仕舞った。人は私の口の臭氣に辟易するであらう。』

『いや、私は臭氣などを恐れるものでない、どうか人生の旅行談一つ二つ、私に聞かしてください。』

『君に若い時代のエレン・テリーが想像されるだらうか……私にはエレンの綺麗な髪と純白な曲線美にほれ惚れた。キユウ・ガーデンの青い草で英國の春は盡きるであらう。草と草との間から顔を出すチュウリップは、まるで小さな仙女だ。』

私は禮儀正しい東洋人であることを喜んだ……

チエルシーで、カーライルの銅像へ朝の挨拶さへしたこともある。』

『あなたは、一體どなたですか。』

『幾千萬とある旅行者の一人だといって置かう。

幻のやうに感激と反省との間を歩いて、

風の如く、空中に消えてゆく人間に過ぎない。

君は私の名前を聞いて、どうなさる。』

春訪る

『ガンガンガン！』

三つ番が静まりかへった冬の暗夜を劈く。

どやどやと家の前を駆ける人の足音を、

寒い北風があとから追つて行く。

いつの間にやら子供も家内も女中も外へ出て仕舞ひ、

私は獨り書齋で蹲り、

轟く胸を押静めて三つ番の音を聞く。

急に電燈がぱつと消える、

雨戸の上の欄間のガラスがさつと赤く見える。

『火事は近くだな』と私は呟く、

勝手口で『火事見舞です』と、だれかが怒鳴るかと思ふと、

木戸の戸をばたんと締めて駆けて行く。

『ガンガンガン……ガンガンガンガン！』

私は『すり番だ』と呟きながら、

一枚開けた雨戸から頭を出すと、

痛い程つめたい風が、木の間から出しぬけに私の顔を打つ。

私は赤く焼けた空を見上げない、

眼前にふくらみ掛けて見える庭の梅の木に氣が付き、

ちつとそれを見詰め、

私は『ああ、春の訪れだ』と獨語する。

認識

私は賑やかな町を歩く、

色々の女や子供が私の脇を通りすぎる。

どの女も見覚えがあるやうであり、まるで知らないやうでもある、

どの子供にも無関係のやうであり、又自分の子供のやうでもある。

私は空想する……假に私の家内が私と擦違ふ、私はそれを直ぐ認めるだらうか。

又私の子供がここに遊んでゐるとする、私を見て直ぐお父さんと呼びかけるだらうか。

私はこんなことを考へながら家に歸る、玄關の戸をがらりと開ける……

私の子供が飛んで来る、私を見て「お父さんお土産は」と叫ぶ。

私の家内がお茶を書齋へ持って来る……なる程（私は思つた、）

これが二十年も一緒になつてゐる私の女房の顔だ。

私は茶を啜り煙草を吹かし、私は思ふ……

私は神様のお顔を知つてゐるやうであり、又知らないやうでもあるが、

若し私が神様の御前に出たならば、私は直ぐそれを認めて、

「おお神様」と叫び、その面前に跪くであります。

机

この机のまはりを掻き廻してはいけない、
硯箱に首の取れさうな筆一本と歪んだ一挺 墨、
ついぞ水のはいつてゐたことの無い水入れがあるばかりで、
机の上には返事をせねばならない澤山の手紙や、
書きぞこなった原稿紙に、最近着いた倫敦ボンチ数冊と、
糊の罐と郵便切手が五六枚散らばつてゐるのみだ……が、

過去と現在と將來の三つが、圯巴に吹き荒れる小さい世界だ。
ここで私は悩み、自らを嗤ひ、自らを嘆美し、
五十近い生命の涙を白紙の上にとらして、
それが時には樂天、時には厭世の文字と顯れて來るのを眺めてゐる。
この机のまはりを掻き廻してはいけない……
私が此處に坐るのも長いことではあるまい、
譬へると、山頂に立つて今降る用意をしてゐるやうなもので、
今しばらくの間私はここに坐り、懺悔の涙で靈魂を洗ひ淨めたいのだ。

人麿

『若し人麿が顯れてあなたに戀をしたならば、あなたはどうしますか』
と私がある女に質問する。

女は私に答へる、『前景乃至は背景のない萬葉時代の人麿に、何の價值がありませう……』

院展に出る木彫の置物以上の價值はありませんまい。

それにしても愚問を出したものですね、

若し人麿が顯れたなどと、そんな悠長な想像談は時代後れでせう……

若し酒屋の小僧が私に戀をし掛けたならば、どうするといふ質問の方が、遙に私に取つては切實に響きますよ。』

懺悔

私はモデル臺に上る。彫刻家は粘土を指先で弄り始める、
彼はいふ、『さあ、これから無言のお話だ。』
私は下眼をつかひ眞直に頭を向ける、ちつとしてゐる、
私の額から、罪の懺悔が雫となって、ぼたりぼたりと滴れる。
彫刻家はそれを花瓣でもあるかのやうに、一滴一滴拾つては、
彼が今作りつつある私の顔にくつつ付けてゆく。

私は自分の顔の意識が重くなつて来るやうに感じ、
果は顔がほてり、頭痛さへし始め、眼も廻るやうに思はれて来る。
私がこの苦痛から逃れたいと思ふ途端に、
彫刻家はいふ、『今日はこれだけ……何だか私の靈が動かない。』
私は心のなかで思ふ、
『私は弱い……君は無言の懺悔を詩の花弁であるかのやうに取扱ふ……
それが私に心苦しい。靈が動かぬのは私のことだ。
許してくれ、明日はもつと強い者となつて君の靈が動き易いやうに勤めよう。』

鶯

ホキキヨウホキキヨウ！

静に、静に、

騒いではいけない、

鶯が三年振に庭へ来て鳴く。

ホケキヨウホキキヨウ！

暗い大地の戸を開ける春の第一聲、

大地の室内で目覚める魂の叫び、

(ホキキヨウホキキヨウ！)

だれの魂でもない……

私の魂だ、

春は私だ、

孤独を破つて自然へ捧げる私の頌歌だ、

(ホケキヨウホキキヨウ！)

甦る人生を歌ふ私の歎美だ。

人はいふかも知れない、『鶯の聲がお前の頌歌だ、

お前の歎美だ、馬鹿をいふな、

鶯は鶯、お前はお前だ、

「鶯が鳴いてゐる」で私共には結構だ。」
成程さうだ、

(ホここホここホケキヨウ！)

私も單に鶯の聲として聞くことにしよう。

鶯が三年振に庭へ來て鳴く、

遠くから聞える鶏の聲も長閑だ、

近所の井戸端で喧しいお神さん達にも情趣がある、

(ホケキヨウここホここホホ！)

皆のもの、障子越しに八手の葉を御覽なさい、

勢ひづいて來るではないか、

太陽の光が地上で青光りし始める。

答

『近頃詩があまり出来ないやうですね。』

私は答へる『どうしてさうお思ひになりますか。』

失禮だが、あなたとは詩は話せない。

言葉の詩と言葉の詩との真中に私はもつと重大な詩を書く……

言葉のない「行爲の詩」を、

言葉以上に完全な詩を。

本當の心の詩が一般の言葉で書ける譯がないぢやありませんか。

私がかう坐つて咲きおくれた庭の松葉牡丹を數へる、

細かい雨に濡れた屋根ぎはの百日紅を眺める（雨に濡れる色は悪くない）

私の一つの耳は木を動かす九月上旬の風を聞き、

もう一つの耳を縁の下で鳴く蟋蟀の聲に敬てる、

さうして第三の耳を……さう話して仕舞つては興がない。

まあまあ、あなたが本當の詩を作らうといふならば、

私の家へやつて来て、私と一緒に無言で煙草を飲むことだ。

私は煙草の烟を輪に吹く……烟は消えゆく……

ほら、そこに私の無言の詩の感歎符エキスクラメーションがある……

あなたにこれが讀めるだらうか。』

疊算

取替へた部屋の疊は、譬へると、渺茫たる大海原だ……

『御覽、もうここに赤ちやんのシツコの跡があるぢやないか。』

私の家内は答へる、『小さいのがある間は疊の綺麗汚いはいつちや居られない、

シツコの跡がお嫌ひなら好きな本でも載せて置いちやいか？』

私は疊を海に譬へた……

海へ小便したとて何でもないと諦めようよ。

私は青い疊の上に坐つて、

マツチを一本その上に投げる……

マツチは大きな棒と變つて海の二つ三つの波の上に落ちる。

私の家内はいふ、『あなた何をしていらつしやる？』

『疊算をしてゐるのだ……丁だ、西乾良東が吉だ、

今度は半だ、それでは巽南と坤北が凶か。

今年は八白土星で始めたことは大抵不首尾とある、

よろしい、それでは庭でも眺め蟻の所へでもいつて、

知識をどつさり習つて來ようよ。』

乾杯

星は星と歌ひ合ひ、
眞實な心は眞實な心に答へ合ふ。
勇ましい人々が出會ふ時、
北もなければ南もない、
東は西と祝し合ふ。

勇ましい人々が出會ふ時、
愛の誓があるのみだ。
私共は生命の人間、死を扱はない、
日光と争闘の勇者だ、
闇黒と涙を否定する、
私共は朝の日光と共に歌ひ、
大股の光線があるく道を行くであらう。
(乾杯だ、乾杯だ、)
勇ましい人々が出會ふ時、
眞理を争ふ世界があるのみだ。

私共はともに同じ星の歌を聞き、

私共はともに同じ運命の海を渡航する。

私共はともに同じ空へ同じ祈禱を捧げる。

(乾杯だ、乾杯だ、)

眞實な人々が出會ふ時、

西は東と祝しあふ。

(さあ、諸君、乾杯だ、乾杯だ。)

第二表象抒情詩畢

第二象抒詩



大正拾五年九月十二日印刷
大正拾五年九月十五日發行
第一刷千五百部

定價一圓八十錢

著者 野口米次郎

發行者 長谷川巳之吉

東京市芝區下橋町二二

發行所 第一書房

電話 高輪一三九四

組版 生田數文社 生田繪次
印刷 第一書房印刷所 萩原芳雄

野口米次郎定本詩集

表象抒情詩

四六判百四十頁
世界的最上美本

定價一圓八十錢

送料十二錢

「今迄自分が書いた日本語の詩集は全部火中へ投じてくれ給へ」——著者はこの定本詩集を作るに際してかう叫んだ。この偉大なる詩人の眞の價値は、實にこの詩集が顯現してゐる。
而して野口氏の定本詩集は本書を第一卷とし次の如き順序で刊行され全六卷を以て完了の豫定である。

表象抒情詩
第二表象抒情詩
第三表象抒情詩

人生詩集
第二人生詩集
第三人生詩集

慶應義塾英文學教授
シエラアド・ウアインズ著

詩人野口米次郎

四六判二百五十頁
特製美本口繪四葉

定價一圓八十錢

送料十二錢

本書は野口米次郎氏の價値を最も嚴正に批判したものである。筆者は人も知る如く英國人、従つてその言説には、邦人のものした處のものとは甚だ異つた味があり、更にその所論の範圍は野口氏一個に限らず、野口氏を通して見たる英國人の日本藝術觀である。實に興味に満ちてゐる。



he
lids

③

ae